大無量壽經における三偈の位置について

――選擇・廻向・成就の意味――

幡　谷　明

親鸞聖人によつて明らかにせられた、眞實の佛教としての淨土眞宗は、「說二如來本願一爲二經宗致一、卽以二佛名號一爲二經體一」る大無量壽經を、根本の所依として成立つている。その經における宗體としての本願の名號は、聖人が自らの生命の宗體として、よき人法然上人より領受せられたものであり、そこに自らの宗體として見出されたものこそ、一切の群萌に開示せられた眞實普遍の法であることを、かねて經道滅盡と豫告せられてあつた末法五濁の世に公開せられたものが、淨土眞宗に他ならない。

その大無量壽經（正依經典である魏譯）には、周知の如く、嘆佛偈・重誓偈・往覲偈と呼ばれる三つの偈文が說き示されている。

蓋し佛教の經論釋の中には、數多くの優れた偈頌・讃歌が說かれており、印度における論部の一般的性格としても、長行より寧ろ偈頌の方が本文と見做されていたようである。吾々はそれ等の偈頌・讃歌を諷誦することによつて、その底に流れている深い宗教的感情に觸れることが出來るのであり、手近い所で言うなら、過去における眞宗の同朋教團が、正信偈や三帖和讃を讀誦することによつて、その純粹感情に喚び醒され、それを語り傳えて來たものであることの上にも、見出すことが出來るであろう。故にもし庶民の宗教と言われる眞宗の教法が、現代においていかに精緻な論理でもつて思想的に體系化せられようとも、そこに偈頌や讃歌を生み出した深い宗教

的感情が見出されないとすれば、それは何處かで現實の大地から遊離したものとなるのではないであろうか。

吾々がいま大無量壽經に說き示された三つの偈頌について、窺つてゆきたいと思い立つたのは、かかる意味からしてであり、偈頌を通して大無量壽經を見開いてゆく道がないであろうかと考えたが爲に他ならない。

それについて、ここで先ずもつて斷つておかねばならないのは、既に金子先生によつて、本願の他力廻向の意義を表顯する、選擇・廻向・成就の意味が、夫々この三つの偈頌においてよく顯彰せられていることが、教示せられていることであり、小論はそれに對しての極めてかりそめの領解に過ぎないことである。

一

古來注意指摘されているごとく、宗祖の經典に對する領解の態度には、一つの基本的態度とも言うべきものが見られる。それは經の中心に說かれている正宗分よりも、最初に置かれている序分を重要視し、序分に依つて領知せられた教法承受の態度でもつて、正宗分の意趣を聞思せられていることである。いま當面の問題である大無量壽經に關して言えば、教卷にはそれのみが眞實教を明かせる根本經典であることを、序分における五德現瑞、如來出世本懷の教說をもつて說き盡され、大經和讃にもその場における尊者阿難の請問をもつて表し示されている。そこに吾々は、宗祖にとつての最大關心事は、何が說かれているかという所說の內容よりも、それを通して、釋尊が教說し給うた不可思議の因緣を、「いづれの行も及びがたき身」と信知せしめられた自身の宿業の根底に、問い見究めてゆくことに置かれていたことを、窺い知るのである。かかる宗祖の大無量壽經に對する態度は、心想羸劣の凡夫である韋提希が、「何宿何罪生二此惡子一」と問えることを機緣として開顯せられた、大悲の教說としての觀無量壽經に身を置いてのものであることは、明らかである。そしてその態度は、既に唐の時代にあつて、攝論學派からの別時意の論難による淨土教存亡の危機に際し、聖淨二門の教判を下された道綽の深意を承けて、解學と行學の根本的相違の上から、觀無量壽經が定散二善に表わされた念佛に依る凡夫救濟の教えを說かれたものであることを、聖道諸師に對して身をもつて答えられた善導の上に見出されるものである。すなわち善導は、聖道諸師が自らの修得せる學問をもつて、正宗分を客觀的に解釋したのに對し、自らの宿業において

序分を主體的に領解せられたのであり、そこに散善の願われる宿業の現實から求められた定善の法において、淨土の大悲を說き稱名の一道を示されたものが、凡夫有緣の敎としての觀無量壽經であることを顯わし示されたのである。そして宗祖はその善導を、「順二彼佛願一故」の五字に全身を托された元祖において見出されたのであり、度重なる旣成敎團からの彈壓の中にあつて、自らの身證し得た救濟の事實が內包する歷史的普遍的意義を、かねて「特留二此經一止住百歲」と彌勒に付屬せられた大無量壽經に遡上つて、領受開顯せられたのである。すなわち、よき人法然上人との値遇において、「たゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」という簡明直截な敎法に、自らの出世本懷を見開かれた宗祖は、それが釋尊自らの出世本懷であつたことを、大無量壽經の上に見出されたのであり、しかもそれが自身における救濟の事實を通してのものである限り、宗祖は大無量壽經の眞實敎であることを證明する必要もなく、出世本懷の文の引用を以つて充分なるものとせられたのでなかろうか。少なくとも、宗祖が大無量壽經序分における佛弟子阿難と敎主釋尊との値遇の上に、宗祖自らと元祖法然上人との値遇という、生涯かけて常に新らしく呼び起されて來る歷史的事實のもつ、歷史的原始的意義を見出されていたであろうことは、間違いのないことと思う。

釋尊は廿七年間最上の侍者として自らに仕えつつも、遂に眞實の自己に遇うことなく空しく流轉し來つた聲聞弟子阿難の上に、久しく待たれ願われてあつた時節到來して、宿緣の開發せるを見透され、始めて自らの出世本懷を語り告げられたのである。それは敎卷大意釋の後に出世本懷の文として引用せられた平等覺經に、「若不下安在二佛邊一侍レ佛也。」と說かれていることによつても、窺い知られるであろう。或いはこの經說は釋尊が常に大悲出世本懷である「光二闡道敎一欲下拯二群萌一惠以眞實之利上」を說かれて來たことを、今日始めて阿難が知ることの出來たことを表わしたものと領解することが、正當なことであるかも知れない。

吾々はそこに、菩提樹下において成道せられた釋尊が、自らの悟れる法は凡夫の有限相對なる分別にとつては、餘りにも甚深難解のものであることから、數週間に亙る自受用法味に入られたのに對し、梵天の重ねての勸請から漸やく菩提樹下を去つて、初轉法輪を垂れられたと言う釋尊傳の一節を、想い起すであろう。或いは大無量壽經の作者の胸中には、釋尊の初轉法輪の內面的意義

が深く思念せられてあつたのかも知れない。もし假りにそうであつたとすれば、吾々はこの經典において、五德現瑞を智見せる阿難に對して、釋尊が「諸天教レ汝來問レ佛耶。自以ニ慧見一問ニ威顏一乎」と問い正されていることが注意せられてくるのである。初轉法輪について示す釋尊傳と、出世本懷について說くこの經典との間に見られるこの相異點は、一體どのように理解し解釋すればよいのであろうか。蓋し釋尊傳における梵天の勸請は、婆羅門において傳承され來つた古き眞理が、釋尊によつて新しく見出された眞理に代えられたという、印度宗教思想史上における釋尊の教法のもつ歷史的意義を象徵するものであると思われるが、その場合梵天は釋尊が他に教說せられることを請うたのであつて、必ずしも自らの爲に教說せられることを求めたのではなかつたのであろう。それに對して今の經典では、釋尊によつて慧見と指摘せられた如く、釋尊の身に顯われた威顏を見出したのは、阿難自らにとつても明確にその問いのもつ深い意義を知り得ない程に、阿難の身において問われたのであり、それは阿難をして教法を聞き求めさせて來たところの、生死の世界と直結する深層意識とも言うべき深い願心が、問わしめたものと言つてよいであろう。故に釋尊は阿難の自意識とはなり得ない程の問いのもつ深い意味を、「所レ問甚快、發ニ深智慧眞妙辯才一　愍ニ念衆生一聞ニ斯慧義一」と示されたのであり、經典作者はかかる問いと、それに應じて顯わされる釋尊の悟りとの深い意味を、そのような態でもつて明らかにしようとしたのではなかろうか。恐らくそこには淨土教がその名に依つて既に示されている如く、本來內包しているところの大地性とも言うべきものを、「梵天」と「佛弟子」との關係において表わそうとする意圖が、その底に祕められていたのではないかと思われる。孰れにしても、大無量壽經が釋尊の初轉法輪の內面的意義を、菩薩道を中心とする大乘佛教の立場から、開顯したものであることは、明らかなことである。

尙ここでその點に關連して、同じく出世本懷の一大事因緣を說かれた、法華經と大無量壽經について觸れておきたいと思う。法華經の方便品は、如來壽量品と共に原始分と解釋されている程、法華經において決定的意義を有する一品であるが、そこには智慧第一と言われる舍利弗が、如來の希有の瑞相を現觀せる彌勒菩薩の勸勵を承けて、法華經を教說し給うことを致請したのに對して（序品）、「舍利弗取レ要言レ之無量無邊未曾有法、佛悉成就、

止舍利弗不レ須二復說一、所以者何、佛所二成就一第一希有難解之法、唯佛與レ佛乃能究盡…」と答えて甚深難解の法であることを重ねて偈頌でもつて示され、舍利弗がそれに對して疑心を懷ける四衆の代表者として重ねて教說を懇請したのにも拘らず、釋尊は再度「止止不レ須二復說一」と答えられ、更に重ねて舍利弗が三度の懇請をしたのに應えて、漸く「云何名下諸佛世尊唯以二一大事因緣一故出中現於世上、諸佛世尊欲レ令下衆生開二佛智見一使レ得二清淨一故出二現於世一」と、教說せられているのである（方便品）。そこから吾々が感じ取るものは、大無量壽經から受け取るものとは、明らかに感じを異にしている。すなわち法華經においては、甚深難解の法であることが、智慧第一の舍利弗に依る三請において示され―これは明らかに釋尊傳における梵天の三請を繼承せるものである―、衆生に佛智見を證得せしめようとせられる一大事因緣が說かれているが、大無量壽經においては、多聞第一の阿難によつて、先ず佛々相念の大寂定の境地が慧見せられ、その場における一度びの讚仰を緣として、三界の群萌を大悲しての出世本懷である、阿彌陀佛の本願が說き示されているのである。そこに吾々は智慧と慈悲の問題を知らされると共に、大無量壽經における阿難の問いの意義を深く思い知らされるのである。すなわち、どちらの經典にしても、佛弟子の請問が如來によつて久しく待たれてあつたものであることに相違はないが、法華經ではそれが甚深難解の法の蔭に隱されて、大無量壽經における阿難の問い、亦それに卽應して說かれた如來の出世本懷程、吾々に直接的に響いては來ないのである。そこに大無量壽經は、佛弟子に依る聞思の教說であることが、よく表わし示されているというべきであろう。

蓋し叡山において二十年間に亙り、法華天臺の學問を修得せられた宗祖が、教行信證に一度も法華經を引用せられなかつたのは、決して法華經を無視された爲ではなくて、寧ろ法華經に提起せられた問題の解答を、大無量壽經に見出されていたが爲であつたと思う。

二

大無量壽經において釋尊の自內證は、五十三佛によつて傳燈され來つた本願の歷史における、世自在王佛と法藏菩薩との値遇でもつて語り出されている。そこに示された、錠光如來＝燃燈佛を發瑞とする五十三佛の傳燈は、旣に古く阿含經典に說かれ、諸部派に依つて歷史的展開を遂げつつ傳承されて來たものであり、釋尊は前生

において修行者として燃燈佛の前に誓願を起し、布髪供養して成佛の授記を得られたという經說を原型とし、更に大乘佛教興起の當初に大乘菩薩道の根本精神を開闡する爲に說かれた華嚴經入法界品の經說等を承けて、成立つているものと考えてよいのであろう。それは釋尊入滅以來佛弟子達によつて求められて來た釋尊成道の內面的意義を、過去の思想史的展開を承けてそれを完結し、その問題に對して明確な解答を與えるという、歷史的根本的な課題をもつて出現したものが、大無量壽經であることを物語つていると思う。

そしてここに、「私は過去の正覺者達が辿られた古道・古徑を發見したのである」と說かれた釋尊を想い合わすならば、この五十三佛の傳燈を基點とする法藏說話は、その教說を更に具體的な態でもつて開顯することに依り、法の常恆不變なる眞理性を、凡ての衆生に親しく現證せしめようとせられるものであることも、よく領解せられるのである。

恐らく教主釋尊が自らの出世本懷として、佛弟子阿難に法藏說話を語り告げられる時、釋尊は阿難と結ばれた深き因緣の上に、遠く世自在王佛と法藏菩薩との値遇を憶い、自らの出家と開悟の歷史的・原始的意義を、深く思念せられてあつたのであろう。

大無量壽經には、その極めて嚴肅な重要な意義をもつ箇所に、嘆佛偈をもつて師佛に遇い得た法藏菩薩の願心を、表わし示されている。法藏菩薩は「棄國捐王」せしめて悔いなき道を、「如來・應供・等正覺・明行足・善逝・世間解無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊」の德を身に具現し給う世自在王佛の上に見出したのであり、そこに吾々は法藏菩薩における回心を領知せしめられるのである。大無量壽經の傳燈者である七高僧の生涯において、そこに共通して回心が見出されることは、七祖の生涯を見てゆく者にとつては容易に氣付かれることであるが、吾々はその回心の最も原始的な意義を、この法藏菩薩の上に見出すことが出來るのではなかろうか。そしてそこには、阿難が大寂定に入り給うた釋尊の上に、五德の現瑞せられてあることを見出し讃仰したことの意義が、暗に答え示されているのでもあろう。

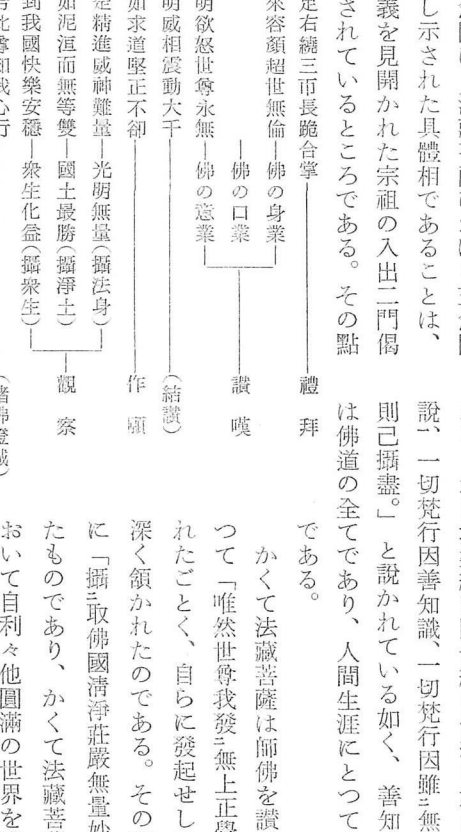
嘆佛偈については、既に古くは法霖の「淨土論寶積錄」卷下(七丁左～八丁左)に、近くは金子先生が「大無量壽經講話」上卷(一六〇頁)に、この大無量壽經に依つて優波提舍願生偈を著した世親の淨土論に關連して、五念門の原始形態がこの嘆佛偈の上に見出され得ることを、注意指摘せられて

いる。但しそれは、その他にも先哲によつて種々と五念門の典據が汎く諸經論の上に探し求められていることによつても知られる如く、五念門の典據を意味するものとしてではなくて、五念門の典據を意味するものとしてではなくて、五念門が佛教における宗教的實踐道の基本的形態であることを表わしているものと見るべきであろう。それについては曾つて淨土論と無量壽經の構造的關係について述べたことがあるが、ここで嘆佛偈と五念門の關係を圖式化して示すと、凡そ次の如くである。

淨土論に示された五念門は、法藏菩薩における五念門が、歴史的現實に顯わし示された具體相であることは、論註に依つて論の眞實義を見開かれた宗祖の入出二門偈の上に、既に明らかにされているところである。その點から見れば、嘆佛偈は原始の念佛者である法藏菩薩によつて表わされた願生偈であると、言つてもよいであろう。

その淨土論について、曇鸞は論註（上卷）に、「天親菩薩在二釋迦如來像法之中一、順二釋迦如來之經教一、所以願レ生。願生有レ宗、故此言歸二於釋迦一」と註釋せられているが、願生の宗・所依となるものは善知識であり、師教の發遣に依つてのみ吾々は願生道に立たしめられるのである。かの涅槃經に阿含經の傳統を承けて、「如二經中說一、一切梵行因善知識、一切梵行因雖二無量一、說二善知識一則已攝盡。」と說かれている如く、善知識との値遇こそは佛道の全てであり、人間生涯にとつての根本問題なのである。

かくて法藏菩薩は師佛を讃嘆することによつて「唯然世尊我發二無上正覺之心一」と說かれたごとく、自らに發起せしめられた願心に深く領かれたのである。その願心こそは、經に「攝二取佛國淸淨莊嚴無量妙土一」と示されたものであり、かくて法藏菩薩は淨土建立において自利々他圓滿の世界を成就すべく、そこに「願佛爲レ我廣宣二經法一」と請求せられ



たのであるが、それに對し師佛は唯「汝自當レ知」と答えられているのみである。しかしその無上命法とも言うべき「汝自當レ知」の四字に、實は師教の全體が攝し盡されているのであり、師教が一切の思慮分別を絶して「汝自當レ知」と聞えたところに、法藏菩薩は「斯義弘深非二我境界一」と、自己の全體を師教に歸投せられていつたのである。そこに吾々は、眞實の教法は決して私することを許さないという、教法の尊嚴性と機受の分限を見出すのである。そしてもし憶測を加えることが許されるならば、そこには、釋尊が入涅槃を目前にして阿難に遺誡せられたと言われる、「自燈明自歸依　法燈明法歸依」と言う釋尊の根本教説の意味が、最も具體的な態でもつて表顯せられようとしたものと見ることが出來るであろうし、そして更には善導が觀經に依つて明らかにせられた二種深信の原始的意味を、そこに見出し得ると言つてもよいのでなかろうか。

かくて大無量壽經には、法藏菩薩における「具二足五劫思惟一攝二取莊嚴佛國淸淨之行一」を說き示し、師佛の證誠を承けて四十八願を表白せられるに至つたことを、說き明されている。周知のごとくこの經說は、淨土教において決定的意義を有するものであり、曇鸞は略論淨土義の劈頭に、淨土はいかなる世界であるかを表わすのに、この經說の引用をもつて說き盡され、元祖も二行章において、異譯との照合から攝取を選擇と決定することによつて、稱名念佛が選擇本願の行であることを開顯せられている。今は宗祖の愚禿鈔（上卷）に依つて、經說の意味を窺つてゆきたいと思う。

宗祖はそこで、淨土眞宗が他力横超の直道を明かせる宗教であることにつき、「横超（選擇・本願眞實報土即得往生也）」と示された後、それを承けて更に、大無量壽經について、法藏菩薩と世饒王佛と釋迦如來における三選擇を立て、その中、法藏菩薩に本願・淨土・攝生・證果の四選擇を、世饒王佛にも本願・淨土・讃嘆・證成の四選擇を設けられている。これを元祖の選擇集（付屬章）に明かされた大無量壽經の三選擇（本願・讃嘆・留教）に照らして見ると、そこに宗祖獨自の大無量壽經觀を知ることが出來るであろう。すなわち、宗祖はここに選擇本願の淨土は、法藏菩薩個人によるものではなく、師佛である世饒王佛の師教を諦聽するという値佛の因緣において選擇攝取せられたものであることを、特に明らかにせられているのである。識者によつては、その宗祖の獨自の見解と見られるものも、既に元祖が本願章に、「問曰彌陀如來於二何

時何佛所二而發三此願一乎」と問い、大經・大阿彌陀經の文に依つて、法藏の選擇本願と淨土は、師佛世饒佛が先ず選擇して法藏菩薩に選擇せしめられたものであると答えられているところに、見出されるものであると言われるかも知れない。恐らく宗祖の己證も元祖の師教に基くものであろうが、元祖においてはこれ程までに世饒王佛と法藏菩薩との不可分離な相應關係が、明確に決擇せられてはいない。吾々はここに、かかる宗祖の己證がいかにして生まれ來つたかを考えるについて、恐らくそれは愚禿鈔の劈頭に、「聞二賢者信一　顯三愚禿心一」と表白せられたごとく、生涯をかけて師教に自らの道を聞き開いてゆくという、佛弟子としての宗祖の根本的態度が、それを見開かしめたものでないかと思う。そして宗祖が特に、五十三佛の傳燈を背景とする世饒王佛に依る選擇本願と選擇淨土を說かれたことによつて、釋尊が「如來世に出づるも出でざるも、この法は常住にして不變なり」と教說せられたごとく、無始時來法界に流れ來つたものこそ本願であることが明らかにされたのである。實に法藏菩薩はその本願の根底に深く思念せられてあつた念佛の法を、本願流傳の歷史において選擇攝取せられたのであり、念佛はそこに始めて人類の流轉の歷史の上に、開顯せられたのである。故に法藏菩薩は、本願の歷史的課題を荷負つて、本願の歷史の流れの中に誕生せられたのであると、言つてもよいのではなかろうか。恐らく師の世饒王佛が法藏菩薩に對し、讃嘆し證成せられたのも、自らが繼承し來つた本願の歷史的課題が果し遂げられてゆくことを、法藏菩薩の上に見出されたが爲に他ならなかつたからであろう。

前上述べて來たことによつて既に明らかなごとく、嘆佛偈は法藏菩薩における選擇本願の生れ來つた內面的世界を表わせるものであり、既に曾我先生が四十八願の別願に對應する總願であると指摘せられ（大無量壽經聽記六九頁）、金子先生もまた終りの三偈に注意せられて、「十方世尊　智慧無礙　常令三此尊　知二我心行一」の願が展開したものが第十七願であり、「假令身止二　諸苦毒中一　我行精進　忍終不レ悔」の願が具體化せられたものが、第十八願であると見られる旨を指摘せられていることによつて（大無量壽經講話上卷一一八頁）、その意味を窺い知ることが出來るであろう。

三

大無量壽經には、四十八願を說かれた後、更に續いて重

誓偈とも三誓偈とも呼ばれる偈文を、掲げ示されている。

（西山・鎮西では、最後の「斯願若廻果…當雷珍妙華」を第四誓として古来、四誓偈と稱している）

本來誓という字は、約束する、命令する、語り告げる等の意味をもつ言葉である。既に四十八願は、古來王本願と呼ばれる第十八願に、「設我得佛十方衆生…若不生者不取正覺」と示されてあるごとく、十方衆生の只中に自らの身を置いて選擇攝取せられたものであつた。故に今重ねて誓われたということも、單に十方衆生に對してではなく、十方衆生の問題を荷負し給える法藏菩薩自らが、それ自らに對して必らず本願を衆生の上に成就し遂げることを命令し約束し語り告げられたものである、と言わねばならない。そして吾々は、大無量壽經における釋尊の教說を通し、法藏菩薩自らの名告りを聞くことによつて、それが亦吾々自らに對する無上命令であり約束であり宣言であることを、自身の上に深く思い知らしめられるのである。故に重誓偈は、法藏菩薩における本願成就の決意の深さを表わすと共に、法藏菩薩をしてかく重誓せしめた、吾々における生死流轉の根源の深さを示せるものとも言わねばならないのである。

重誓偈に示された、(1)「我建二超世願一　必至二無上道一　斯願不二滿足一　誓不レ成二正覺一」、(2)「我於二無量劫一　不下爲二大施主一　普濟中諸貧苦上　誓不レ成二正覺一」、(3)「我至レ成二佛道一　名聲超二十方一　究竟靡レ所レ聞　誓不レ成二正覺一」という三誓について、金子先生はそれが順次に(1)選擇　(2)廻向　(3)成就という本願における三義を、よく表顯していると言われているが（大無量壽經講話上卷三三八頁）、以下この三誓を中心に、大無量壽經における重誓偈の位置を、窺つてゆくことにする。

ここに「我建二超世願一　必至二無上道一」と示された第一誓は、既に法藏菩薩が師佛に値えるところに、「尋發二無上正眞道意一」と說かれ、嘆佛偈を說かれた後にも直ちに師佛に對し、「唯然世尊我發二無上正覺之心一」と表白せられ、そして更に二百一十億の諸佛の淨土を說き給う師教を聞き了つた後にも、「超二發無上殊勝之願一」と述べられていることを、承けて出て來たものである。そのような經說の展開過程を辿つてゆく時、吾々はそこに更めて、法藏菩薩における選擇本願ということの意味を、思い知らされるのである。すなわち、奇しくも師佛に遇い教說を聞き得た信の初一念において、自らの底深く懷き取られ見出され得た願心が、師德の讃仰、師教の諦聽、更には本願の開說という歷程を通して、限りなく自らの內面に領かれ確認せしめられて來たものが、法藏

菩薩における選擇本願の行であり、五劫思惟の歴史に他ならない。故にそれは師教との値遇において廻向せられた、ただ一度の回心そのものの、永劫回歸・反復の歴史的展開の行相であると、言い換えてもよいのではなかろうか。

かくて法藏菩薩は重誓偈の劈頭において、「我建二超世願一　必至二無上道一」と掲げ示されたのであり、世と共に世を超えてゆこうとせられる法藏菩薩の擧體的表現に觸れるところに、方向を見失つたまま空しく今日に至るまで流轉し來つた吾々の生涯も、始めて建て直されてゆくのである。そしてそこから更に、「我於二無量劫一　不下爲二大施主一　普濟中諸貧苦上」と誓約せられた第二誓について見てゆく時、吾々はそこに先の第一誓が、法藏菩薩における從因向果（如去）の意味を表顯せるものであるのに對して、これはまさしく從果向因（如來）の意味を開顯せるものであることを、窺い知ることが出來るように思う。蓋し從因向果・從果向因（如去・如來）と言つても、それは衆生界を内に包んでの一如法界における出來事である限り、兩者の間に時間的順序關係が見られよう筈はない。もしそこに如來と菩薩を實體化し、その兩者の關係を因果關係でもつて結合しようとするならば、たとえそれが如何に精緻な態でもつて辯證されたとしても、それは所詮對象論的な虚妄分別に基く戯論にしか過ぎないのである。そこに如來と如去との相卽性（一如性）、乃至は無住處涅槃をもつて表わされた菩薩道の意味を、深く思念すべきであると思う。

吾々がこの第二誓において見出すものは、いかに衆生流轉の世界の只中に身を置くとも、それによつて自らに荷負せられた志願を見失なわないという、法藏菩薩によつて象徴せられた佛教の高貴性とも言うべきものである。それはこの三誓に引き續いて示された、「志二求無上道一　爲二諸天人師一」、「願慧悉成滿　得レ爲二三界雄一」、「願我功慧力　等二此最勝尊一」等の偈頌においても明らかなところであり、その高貴性に觸れればこそ、本願の聞思により貧苦と認知させられ、凡夫と信知せしめられても、それは決して自己自身に對する卑下や輕視とはなり得ないのであり、いな寧ろ却つて貧苦としての凡夫それ自らの存在價値の尊嚴性に立ち還えらしめられるのである。もし吾々が自らを根底から支えている本願の深さ重さに氣附かしめられないならば、たとえ自意識の世界において自己の存在價値を主張していようとも、それは所詮自己に遇わざる者の増上慢にしか過ぎないのでなか

ろうか。實に本願のみが自己をして、增上慢や卑下慢の何れにも立ち至らしめることなく、あるがままの現實相を謙虛に領受せしめ、そこに安住しつつ、それを超えしめてゆくところの、唯一の根源的立場となるものである。

この第二誓が重誓偈の主題となるものであることは、三誓の後の偈文、更にそれに引續いて說かれた法藏菩薩兆載永劫の修行を表わす勝行段の文を見ることによつて、明らかなことであろう。そこに示された廻向の精神によつて選擇せられ、具象化せられたものが、次の「我至レ成二佛道一　名聲超二十方一　究竟靡レ所レ聞」という、第三誓であることは言うまでもないことである。

この第三誓は四十八願の總結とも言うべきものであり、第一誓が勝因段に、第二誓が勝行段に對應するのに對して、この第三誓は勝報段に對應し、更に下卷の本願成就文に對應するものである。故に宗祖も特にこの第三誓については深く注意せられたのであり、正信偈においては、第十七願の意義を開顯するに當り、この第三誓によつて「重誓名聲聞二十方一」と示し、それによつて酬報せられた勝報段の十二光佛名を列擧せられ、そしてそれを「本願名號正定業」と結釋されたのである。それは亦、教行信證における宗祖御引用の上にも窺われることであり、行卷には第十七願文の後に、この第三誓と、「爲レ衆開二寶藏一　廣施二功德寶一　常於二大衆中一　說法獅子吼」の偈を引用せられ、信卷にも橫超釋の後に勝因段の「超二發無上殊勝之願一」の文に續いて、第一誓と第三誓を引用せられているのである。

尙、宗祖が教卷の大意釋に、この重誓偈に依つて「彌陀超二發於誓廣開二法藏一致レ哀二凡小一選施二功德之寶一」と示され、それを「釋迦出二興於世一光二闡道教一欲レ拯二群萌一惠以二眞實之利一」という經の序分と相應せしめ、「是以說二如來本願一爲二經宗致一卽以二佛名號一爲二經體一也」と釋顯せられていることは、注意すべきことであろうと思う。

蓋し、光壽二無量の世界は、無明長夜の世界にあつて智眼をもたず、生死大海の只中にあつて罪障の重さに打ち拉がれている、衆生の生命の底深くにあつて願われてあるものでありながら、日常的自意識においては、それが眞に自己自身の根源的な願心の具體的內容であることが自覺され難いものである。その衆生の根源的願心を衆生に先立つて見透し、それを自らの名として衆生の上に名告り顯現せられたものが、如來選擇本願の名號に他な

らない。故に吾々は稱名念佛する時にあつてのみ、たとえ日常の生活にあつて自己の本來的主體性を見失つて流轉していようとも、そこに本來の自己自身に立ち還えらしめられるのである。そして吾々は生涯かけて名に喚び覺され、名の世界に歸入してゆくのであり、淨土に往生して成佛するということも、自己の全體がその名そのものに成り切ることの他にはないことと思われる。名號について機法一體が語られ、約機約法の二義が示されることも、恐らくはその點に立脚してのことでないであろうか。

かくて吾々はこの三誓において元祖が念佛を不廻向の行と示され、そして更に宗祖に依つてそれが如來の本願力廻向の名號であると說かれたことの一端を、窺い知らされるのである。そのように重誓偈は、凡べての存在がそこにおいてのみ成立ち、それによつてのみ本來の世界が顯わにせられる根源的立場として、名號を選擇攝取し、それを何處までも衆生の自覺の上に廻向成就せられようとする、法藏菩薩の願心について說き示されたものである。かくて重誓偈はその三誓に共通して示された、「誓不レ成二正覺一」という誓願を結ぶに當つて、最後に「斯願若剋果　大千應二感動一　虛空諸天人　當雨二珍妙華一」と、說き表わされたのである。この一偈が誓願の成就について表顯せられたものであり、まさしく三誓の結願を說示されたものであることは、今更說明するまでもないことである。故に經典には重誓偈の終つた箇所に、「法藏比丘說二此頌一已應レ時普地六種震動、天雨二妙華一以散二其上一自然音樂空中讚言　決定必成二無上正覺一」と說かれたのであり、そこから更に永劫の修行が說き出されているのである。その點からして、この「決定必成二無上正覺一」の一語は、上來の勝因段以來の五劫思惟の成就を明確に決定付けたものであり、下の勝行段を惹き起すところの承上起下の文として、極めて重要な意味をもつものであることが知られるのである。

四

前上、大無量壽經上卷に說き示された嘆佛偈と重誓偈について、選擇と廻向の意味を窺つて來たのであるが、次に下卷に說き示された往覲偈について、成就の意味を窺つてゆきたいと思う。

周知のごとく、下卷には先ず本願成就文を揭げて念佛往生の意味を說き明かされ、次いで諸行往生について說き示された後、更に往覲偈を以つて諸佛の讚勸を說き表

わされている。

この往覲偈について先ず注意せられるのは、下卷の初めに第十七願成就文が示されてあるのと同様に、往覲偈の初めにも第十七願成就文が示されていることである。宗祖は行卷の大行釋の後に、先に述べた重誓偈に引續き、この兩つの成就文を連引し、更に今偈の中心に示された、「其佛本願力　聞レ名欲ニ往生一　皆悉到ニ彼國一　自致ニ不退轉一」の文を引用せられている。恐らく宗祖は菩薩も凡夫も共に選擇本願の名號を聞くことによつて、正定聚不退轉に至らしめられるという經說の上に、誓願一佛乘ということを見てゆかれたのであろう。故に我々もその觀點に立脚して、往覲偈の意味を窺つてゆきたいと思う。

周知のごとく往覲偈は、現存梵本及び異譯經典（漢譯・魏譯を除く）では、前後二分せられ、後半の「若人無善本」已下の偈文は、卷末流通分の難信を說く箇所に置かれている。內容的には異譯經典の配置の方が一應自然の形態であると考えられ、何故それが正依經典において一つに整められたのか、その理由については明らかでない。それについてこれまで考えられた理由としては、恐らく金子先生が、釋尊と諸佛と說意が同じであることを彰わすものと解釋するより他はないと言われている程度でなかろうかと思われる。（大無量壽經聞思錄一四五頁）その理由についての私見は後に述べることにして、ここでは先ず偈の內容について窺つてゆくことにする。

偈の前半は、その中心に「當レ授ニ菩薩記一」とあるごとく、菩薩に對する授記を主題とするものであるが、そこで注意せられるのは、觀無量壽經序分に、阿彌陀の淨土を別選し了つた韋提希が、教我思唯・教我正受と請問したのに對し、始めて釋尊が卽便微笑して、阿彌陀の淨土を說き出されたごとく、觀音菩薩が無量壽佛に對して、「佛何緣笑」と尋問せることを緣として、菩薩の授記が說き明されていることである。それは十方諸佛國より往覲せる菩薩達の中心の願いが、觀音菩薩によつて象徵せられる大悲の問題に置かれていたことを、表顯するものではないであろうか。もしそうであるとすれば、吾々はそこに、次の二つの意味を考えることが出來るように思う。

すなわち、一つには、經の序分に示された釋尊最上の待者である阿難の請問に依る釋尊大悲出世本懷の開顯に對應して、ここでは阿彌陀佛の脇士である觀音菩薩の請問に依る阿彌陀佛の大悲出世本懷が開示されようとして

いると見られることであり、二つには、今偈の後半に示される智慧の内容に先立つて、大悲の意味を表わすことにより、阿彌陀佛の本願が大悲の智慧の他にはないことを顯わされたものと、窺うことが出來るように思われる點である。そのような大悲の問題は、次に「吾悉知二彼願一　志二求嚴淨土一　受決當二作佛一」と示して、法は夢・幻・響・電影のごとしと覺了し、法性は一切空無我と通達しておつても、それのみでは眞實の悟りとは言い得ないとし、專ら淨佛土を求め必ず無量壽に依つて受記を得、等覺を成ずべきことを教諭せられていることの上にも見出されることである。これは般若皆空の具體的實踐も、願生淨土に依る淨土建立においてのみ成就せられることを說くものであり、それによつて大悲利他行の意味を顯わし示そうとされたものに他ならない。

かくて往覲偈では、十方諸佛國から往覲せる菩薩達の根源的要求に應える道として、「其佛本願力　聞レ名欲二往生一　皆悉到二彼國一　自致二不退轉一」という偈文を、掲げ示されているが、先に示された菩薩の授記ということも、ここに明かされた本願力廻向の具體的表現態である聞名に依る正定聚不退轉の他にはないのである。周知のごとく、般若空觀によつて大乘佛教の根本的立場を開闡せられた龍樹も、その實踐道を表顯せられた十住論においては、隨所に稱名或いは聞名による不退轉の道を縷說せられ、更に龍樹の意趣を承けて、無自性空の意味を意識なる依事の上に實存的に解明せられた世親も、轉識得智の現實的な在り方を無量壽經の上に見出し、大乘菩薩道の實踐的課題を、本願力廻向による正定聚不退轉でもつて明確に決擇せられたのである。殊に淨土論における不虛作住持功德の文、及びそこから開示せられた菩薩四種功德の文は、この往覲偈における「其佛本願力」の偈文、及びそれに續く「菩薩與二至願一　願二已國無レ異　普念レ度二一切一　名顯達二十方一」「奉二持億如來一飛化徧二諸刹一　恭敬歡喜去　還到二安養國一」と說かれた偈文と、深い關連性をもつと考えてもよいであろう。それについては、曇鸞が論註(下卷)に、不虛作住持功德の下に、所謂七地沈空を超える道として第十七願の意を示された後、第二十二願を引用し、更にそれを承けて、卷末の他利々他深義釋の下に、第十八・十一・二十二の三願をもつて、如來の本願力廻向には、本來往還二廻向が內包せられ成就せられていることを的證せられている點に、深く注意を拂うべきである。そしてこの最後の二偈の意味は、後に往覲偈に引續いて說かれた衆生往生の果を示す

箇所において詳説せられているが、それと浄土論において、菩薩荘厳に引き續いて解説せられた善巧摂化章以下の論文とが、密接な關連性をもつことから考えても、浄土論の無量壽經優波提舎であることの意味を、そこに吸み取ることが出來るように思う。蓋し佛教の根本的立場を端的に表詮するものは、「觀(法)」ということであろうと思われるが、その「觀」の成就せられた態こそは、「信」として表顯されるものであり、浄土論における「云何觀云何生二信心一」という起觀生信章の問題は、その佛教的課題を提起し、それに答えようとされたものであり、それが「其佛本願力」の偈と相應する不虛作住持功德の處において答えられているのである。

かくのごとく、往覲偈の前半において、「其佛本願力」の一偈が占める位置は、極めて重要なものであり、宗祖はそれを第十八願成就文と同格視して、信卷末卷の成就一念結歸釋の下に連引せられ、銘文においても同文を引用して詳細な解釋を施されている。實に聞名の一念の他に眞實信心はなく、聞名の事實を離れて他力廻向はあり得ないのである。吾々は本願力廻向の名號を聞信することにおいて自然に不退轉の位に入らしめられ、必らず佛と成るべき身とならしめられるのであり、そして吾々は聞信の事實に立つて、自らをしてかくあらしめた自然・必然の根據を、念佛の內面に聞き開いてゆくのであり、限りなく法藏因位の願心に立ち還つてゆくのである。これは今の偈文について言えば、「聞レ名欲二往生一」の內面において、「究竟靡レ所レ聞」と誓われた法藏因位の願心に遇うことであり、そこに「願以成レ力、力以就レ願。願不二徒然一力不二虛設一」る本願力成就の事實を、生涯かけて我身に身證してゆくのである。

既に前節に述べたごとく、法藏菩薩の選擇本願は、從因向果從果向因の二義を內包するものであつた。その法藏の選擇本願の願心が、衆生に承受せられる時、それは必然的に往相・還相の二廻向として現れるのである。すなわち、衆生は限りなく清淨眞實なる浄土を求めしめられることにおいて、限りなく愛憎違順の現實である穢土に立ち還えらしめるのである。往覲偈において、「其佛本願力」の偈に引續いて、菩薩の還相を表わす二偈が示されているのは、その點からしても注意してよいことと思う。

かくのごとく往覲偈の前半は、第十七願、諸佛諸名の願に立脚して、第二十二願の願意を表顯せるものであつたが、それに對して偈の後半は、梵本及び異譯經典にお

ける位置が、よく物語つているごとく、そこには獲信において感得された深い宿縁感と、それによつて改めて見出された聞法の態度と、値遇の意義とが説き示されている。故にそれは屢々大無量壽經の眼目と示される、悲化段の「易レ往而無レ人」の意味を表わそうとせられるものと見てよいのであり、その點からしてそれは嘆佛偈の處で觸れた横超の直道についての選擇本願の意味に相應するものとも考えられるのである。

蓋し釋尊が聞法の因縁として示された、「若人無二善本一　不レ得レ聞二此經一　清淨有レ戒者　乃獲レ聞二正法一」ということは、吾々凡夫の自意識において語り得るものではない。それはただ佛の智見によつて見出された過去世の因縁として、教説に聞くより他なきものであり、しかもそれに逆うことなく理窟なしに頷かしめるものは、値い難き法に遇い得たという、疑うべからざる端的な事實の他にはない。それについて吾々が直ちに想い合わすのは、道綽と宗祖であろう。

周知のごとく、道綽は北周の廢佛を目前に見、末法五濁の到來を誰よりも深く感じ取ることによつて、聖道諸師の説く佛性開顯の道に斷念せられたが、遠く時世を隔して曇鸞の回心に觸れ、唯一有縁の法として淨土の經典を見出されたのであり、攝論學派からの別時意の論難に對しても、別義意説を以つて答えられ、生涯釋尊在世時における佛弟子としての深き因縁を憶念してゆかれたのである。安樂集一部は、行證者道綽における深い宿縁感で以つて貫かれ、佛弟子の祈りを祕めて書き著わされたものに他ならない。かかる道綽の立場は更に面授の弟子善導によつて繼承せられ、深刻な宿業感となつて開き示され、更に元祖に至つて淨土宗の獨立として結實し、宗祖に來つて教行信證の著述となつて開華せることは、今更説明を要しないところである。そして宗祖の教行信證が、末法五濁の世にあつて遇々本願念佛の教えに値い、大涅槃を超證せしめられる佛弟子の身とならしめられた、深い宿縁感によつて成立つていることも、既に周知のごとくである。吾々は求めざるに人身を受け、この教に遇い得た不可思議の因縁を深く思念すべきであろう。

かくて往覲偈には、先ずもつて宿世の因縁を説き示された後、その教法の甚深なることを、「如來智慧海　深廣無二涯底一　二乘非レ所レ測　唯佛獨明了」と、説き明かされている。この一偈は前半における「其佛本願力」の偈と共に、往覲偈の中心眼目をなすものである。金子先生がそれについて、或る意味では、大無量壽經はこの四

句の意味を開顕せられたものであるといつても、差支えないであろうと言われていることによつて、それが如何に重要な意味をもつものであるかを、窺い知ることが出來る。

吾々はこの一偈において、成道後の釋尊が教説を躊躇せられたということを想い起し、亦大無量壽經序分に示された大寂定三昧の内景を憶い知らしめられるようである。この一偈が、「聲聞或菩薩　莫能究聖心　譬如盲從生盲　欲行開導人」の偈に引き續いて説かれていることから見ても、如來の智慧海を開顕せられた大無量壽經が、一乘の法を教説せるものであることを表わすことは明瞭である。故に宗祖はこれを行卷の一乘海釋の後に引用し、誓願一佛乘の教證とせられたのである。

蓋し法華經に示されるごとく、大乘佛教は二乘に簡別して菩薩乘を建立すると共に、更にそれを一乘の法に歸入せしめることによつて、大乘佛教の根本的立場を開闡しようとするものであつた。しかし眞如實相を標幟とする法華經においては、眞に二乘・三乘が一乘に歸入せしめられる道は、必ずしも明瞭にはせられなかつたのでなかろうか。そこには稱名念佛の思想も屢々説かれてはいるが、それが究極的一乘海に入らしめられる道として、必然的なものであることは、何等明確にされているようには思われない。大無量壽經はまさしくその問題に對して答えようとせられたのであり、宗祖は特にそのことを明らかにするために、行卷の終りに一乘海釋を設け、行の一念釋に示された「大利無上者一乘眞實之利益也」を承けて法華經に依らずして勝髪經に依り、南無阿彌陀佛の大行を體とする誓願一佛乘こそ、凡ての者を無上涅槃の妙果に至らしめる唯一の道であることを、説き示されたのである。蓋し如來の智慧海は深廣無涯底であつて、吾々がそれを測知することの出來ないものであるにも拘らず、衆生は現實においては、その識知し得ないものを測知してゆこうとするのであり、それが今ここに「二乘非所測」と斷定を下されてあるところに、吾々は第二十願と、第十八願の「唯除」との願意をそこに見出すのである。すなわちそこには、信心の純不純が人間存在の深いところにあつて、問われているのである。

そしてその第二十願に表わされた人間の深層意識に根ざす根本的執着が、その根源から照らし出される道は、「唯佛獨明了」と示されたごとく、釋迦・諸佛が稱揚讃嘆し給う第十七願の世界による他はなく、吾々はただそれを聞信することによつてのみ、眞實の願海に歸入せし

められてゆくのである。そのことは、信卷に第十八願の教證として引用せられた、今偈の箇所に相當する如來會の、「如來功德佛自知、唯有二世尊一能開示、……二乘自絕二名言一、……是故具二足於信聞及諸善友之攝受一、得レ聞二如レ是深妙法一、當レ獲二重二愛諸聖尊一……」という文と照應することによつて、よく知られるであろう。

ここに「如來智慧海」とあるのは、後に智慧段の所に、「佛智・不思議智・不可稱智・大乘廣智・無等無倫最上勝智」の五智でもつて表わされているが、曇鸞は略論淨土義において詳細にそれを解說し、特に大乘廣智については、諸佛思想の問題に關連して三番の問答を設け、衆生における佛智疑惑の問題を嚴しく批判している。今それについて觸れることは省略するが、前上の考察によつてこの一偈は一面誓願一佛乘を表わすことにより、往覲偈劈頭の第十七願成就文に對應し、他面佛智疑惑の問題に關連するものとして、智慧段以下の經說に對應するものであることが知られるのである。

そしてその智慧段は、將來佛としての彌勒菩薩に對しての敎說であることを考慮する時、既に觸れたごとく、經の序分には過去佛の代表としての燃燈佛について說き、正宗分には現在佛の世界における菩薩達について說いたのに對して、流通分には將來佛としての彌勒菩薩について說き、それによつて阿彌陀佛は三世十方を貫く永遠常住の佛であり、その永遠眞實なるものが、常に今という信の一念の上に開顯せられることを表わそうとしたものこそ、この大無量壽經に他ならないと言い得るのである。そして更に推し進めて言うならば、序分の燃燈佛は佛における法の傳統を明かし、流通分の彌勒菩薩は機における法の傳統を示めせることに對して、法藏菩薩は機法一如の立場を表わすものと見ることも、出來るのでないであろうか。そこに吾々は經の序分に出世本懷を開顯せられるに當つて、佛々相念が說かれた深い意味を知らされるのであり、大無量壽經の眞實敎たる所以を思い知らされるのである。

むすび

前上吾々は大無量壽經における三偈について選擇・廻向・成就の意味を窺つて來たのであるが、それによつて吾々は(1)選擇・廻向・成就とは卽ち本願・名號・信心であり、(2)嘆佛偈は勝因段に、重誓偈は、勝行段・勝報段に、往覲偈は、前半は衆生往生の因果に、後半は智慧段以下に對應するものとして、重要な位置を占めるもので

あることを察知し得たのである。そして、(3)往覲偈において本來二つの偈文であつたと考えられるのを一偈に整められたのは、(a)他の嘆佛偈・重誓偈によつて知られるごとく、後の經説を豫め偈頌でもつて表わすという、大無量壽經の構成に基因するものであると共に、(b)淨土教における大悲と智慧の相應關係を明らかにし、(c)そして更に第十七願と第二十願の相照關係を表わす爲でなかつたか、言い換えれば兩者は並列的關係にあるのではなくて、後半の偈に示された第二十願の世界こそは底邊を形造つておるものであり、その上に更めて見出されて來たものが前半の偈に表わされた第十七願の世界に他ならないものとして、兩者は本來重層的關係に置かれているものであることを、表顯するためでなかつたかということを、窺い知ることが出來たように思うのである。